私とギター・アンプ　第2回

石原 SHARA 慎一郎

エレキ・ギターを話題にする際は、どんな木材で、どのピックアップを搭載したエレキ・ギターを、どこの、どんなエフェクターをどのように接続して、どこのシールド・ケーブルを使って演奏しているか…という風にマニアックな話になることが多々あります。しかし、その際に忘れてはならないのが、ギター・アンプなのです。エレキ・ギターのサウンドの大半はギター・アンプで決まると言っても過言ではありません。ここでは、プロ・ギタリストに聞いたギター・アンプに対する思い入れやエピソードを紹介します。第2回目はEARTHSHAKERのギタリスト、石原 SHARA 慎一郎さんです。

PHOTO：中田英之

エレキ・ギターとの出会いは？

友人がギターを弾いている姿を見て、衝撃を受けた

僕がギターを手にしたキッカケは中学1年生の時に友人がギターを弾いている姿を見て、衝撃を受けたからです。ある日、友人の家へ遊びに行った際に「俺、ギターを弾けるんだぜ！」と言いながら、イギリスのロックバンド、ディープ・パープルの「スモーク・オン・ザ・ウォーター」のイントロを弾いてくれて…。それまで「楽器の演奏」というのはプロにしかできなくて、特にギターは特殊な才能がある人にしか弾けないものだと思っていたのに、自分と同じ年齢の友達がレコードとそっくりにギターを弾いたことがショックで、それと同時に「頑張ったら、自分にもできるかもしれない…」と考えて、ギターを弾いてみたいと思うようになりました。

その後、「ギターを買いに行こう！」という話になったのですが、実はその友人とは別に、アコースティック・ギターを弾ける友人もいて、その彼に見事にそそのかされたんです（笑）。というのも、「アイツだからエレキ・ギターを弾けるのであって、俺とかお前みたいな普通の人間はアコースティック・ギターから始めて、基礎から入らないといけないんだよ」ということを熱く語られ、「それに、俺は音楽教室でアコースティック・ギターを習っているから、お前に教えてあげることもできるよ」とも言っていたので、「そうか、まずはアコースティック・ギターか…」ということで、まんまと彼と一緒にアコースティック・ギターを弾き始めました。

しばらくすると、「これは間違った方向に行っていないか？　俺がやりたかったことはこうじゃないぞ？」という疑問を感じ始め、その友人のお兄さんからエレキ・ギターを貸してもらったんです。こうして、エレキ・ギターを弾き始めたのが中学2年生くらいの時のことでした。その後、高校へ入学してから自分のエレキ・ギターを買いました。

僕が通っていた高校には軽音楽部がなくて、ブラスバンドがクラシックを演奏するような音楽部しかありませんでした。ところが、毎週木曜日の6時間目には「好きなクラブを作って、それぞれの活動をしましょう」という課外授業の時間があり、そこで僕は「バンドを組んで演奏したい！」ということで、軽音楽クラブを作ったんです。その頃に、同級生だったLOUDNESSのボーカルである二井原 実氏とバンドを組んで、高校時代から一緒に活動していました。

あの頃は本当にバンドで演奏するのに夢中で、アンプやドラムを学校で購入してもらったり、放課後も練習させてもらえるようにお願いしたりしていました。それに、学園祭では全校生徒の前で演奏するなど、今の軽音楽部の皆さんがやっているのと同じようなことをしていたと言えます。とても気持ち良かったし、楽しくて仕方がなかったです。特に高校2年生の時の文化祭がすごくウケて、それで味をしめた結果が今に至っています（笑）。「あの時の楽しさがなかったら、今がない」と言っても過言ではありません。友達がすごく喜んでくれていたのがとても嬉しかったです。

ギター・アンプとの出会いは？

カセットのテープ・レコーダーにつなげていた

最初に使ったギター・アンプのことはよく覚えています。中学生の時に友人のお兄さんからエレキ・ギターを借りて演奏していた頃は、アンプを購入するお金がなかったのはもちろん、当時のアンプはすごく高価だったんです。なので、僕は自宅で練習する時はカセットのテープ・レコーダーのマイク入力端子にギター・ケーブルをつないでいました。それが、奥までプラグを挿入するのではなく、半挿しにするとすごく歪んだんです（笑）。それを使ってギターを弾いていました。その後、高校生になってアルバイトをして貯めたお金で買ったのが、ローランドの「CA-40」というアンプでした。

このローランドのCA-40はクリーン・サウンドが心地良いトランジスタ・アンプで、歪みが足りない時はグヤトーンのZOOM BOXというディストーションを一緒に使っていました。でも、言い換えると、アンプ単体ではボリュームを思いっきり上げないと歪まないということなので、当時から「どうすればもっとカッコ良く歪むかな…」ということを試行錯誤していました。

今のシステムにたどり着くまで

いろいろと試した結果、マーシャルに戻りたくなった

その後、しばらくは友人からローランド／JAZZ CHORUS-120を借りて演奏していたのですが、「やっぱりハードロックにはマーシャルのアンプだよね！」と思い始めていたほか、その友人が「マーシャル・アンプのユニット3（キャビネット・スピーカーが2台＋アンプヘッドが1台）を手放したい」と言っていたので、それを安価で譲ってもらって使い始めたのが、僕とマーシャル・アンプの出会いになります。アンプヘッドはマーシャルの「1959」でした。

その機材はプロ・ギタリストになってからもしばらく使い続け、途中からはマーシャルとハイワットの組み合わせで2台のアンプを鳴らして演奏したり、ラックエフェクターを導入したりしました。どうしてもディレイや空間系の音に濁りがあったので、ラックエフェクターを使いながら、よりクリーンな音を求めていったんです。レコーディングの世界にのめり込んでしまうと、そういうところも気になり始めてしまい、当時のマーシャルやハイワットのアンプにはセンド／リターン端子が付いていなかったので、「いっそのこと、ラックエフェクターを入れちゃおう！」ということで使っていました。

とはいうものの、しばらくするとラックエフェクターの綺麗なサウンドに物足りなさを感じてしまい、今度はグルーブチューブというブランドのアンプヘッドを使い始めました。EARTHSHAKERが解散する間際や新たにSLYというハードロック・バンドを結成した際にグルーブチューブのアンプヘッドをメインで使っていたのですが、やはりその後はマーシャルに戻りたくなってしまい…（笑）。僕のローディーからは「マーシャルで良い音を出すのは当たり前です。あまり世間に知られていないアンプを使って、良い音を出すのがギタリストの醍醐味なんですよ！」と力説されていたので、なかなかマーシャルのアンプに戻れなかったのですが、どうしても我慢できなくなってしまい、しまいには1人で購入しに行ってしまいました（笑）。その時に購入したのが、「JCM2000 TSL100」というアンプヘッドです。その後、しばらくしてから4チャンネル仕様である「JVM 410H」のアンプヘッドに移りました。

自分の技術やサウンドをより良くしてくれるのがアンプ。とても大事な機材です。

アンプに対して、望んでいること

アンプ単体で十分な歪みが得られること

オーバードライブやディストーションなどのエフェクターを通さずに、アンプ単体で十分な歪みが得られること。これが僕のアンプに対して、望んでいることです。それから、レンジが広いこと。「このオーバードライブさえあれば、自分の好きな音が出せるんだよね！」という考え方もありますが、どうしてもエフェクターをつなげてしまうと音が細くなってしまいがちなので、特に僕の場合は、バッキングを弾いている時はアンプ単体だけで良い音でしっかりと歪んでくれないとイヤなんです。なので、アンプを選ぶ際は、いつもその点にこだわるようにしています。

それから、僕にとって「アンプ」は単なる音の増幅器ではありません。オーバードライブやディストーションなどのエフェクターを多く使う人は、アンプを音の「増幅器」のような捉え方で使っていることと思いますが、僕にとっては「服」みたいなものなんです。それを着ることによって、気持ち良く感じたり、カッコ良くも見えるなど、アンプはそのくらい大きな存在です。自分の技術やサウンドをより良くしてくれるのがアンプだと思うので、とても大事な機材だと思います。

軽音楽部員への一言コメントを

アンプの方に体を向けて、音を出してみること

アンプの使い方をしっかりとマスターする方法があります。普段、ライブで演奏する場合は自分の背中側から音が鳴っていると思いますが、「その状態で音作りをしてはいけない」ということです。演奏を聴いているお客さんはアンプの方に体を向け、耳から音を聴いています。つまり、アンプと向き合う形で音を聴いているわけです。そこで、ある程度の音作りができたら、アンプの方に体を向けて、音を出してみてください。そして、最前列のお客さんが聴くであろう位置でギターを弾いてみるんです。そうすると、固い音なのか、薄っぺらい音なのかなど、普段ステージ上で聴いたり、アンプに背を向けて聴いている音とはまったく違うものに聴こえるはずです。あとは、もっと厚い音にしたり、固いと感じる部分を削るなどして、気になった部分を調整していってください。

それから、普段は必ず「クリック（メトロノーム）」を使って練習するようにしましょう。これはすごく重要なことと言えます。自分の好きな曲やバンドで演奏する曲をコピーする場合は、その曲を流しながらギターを弾いているので、「弾けたつもり」になっていることが少なくありません。そうではなくて、その曲のテンポでクリックを鳴らして、最初から最後まで、自分1人で弾ききってみてください。そうすると、「この曲はイントロで最初の4回はこうなるけど、あとの2回はこうなって…」とか「2回目のAメロは半分の長さだよね」という風に、普段はメロディーやボーカルの歌で覚えてしまいがちなところも、しっかりと自分の頭で構成を理解することができるようになるのです。「クリックを鳴らしながら、自分の力だけで1曲を通して弾いてみる」ということを続けていると、ものすごく早くギターの腕前が上達します。

さらに、今度はそれをレコーダーなどで録音してみると、自分の良いところや悪いクセなどが客観的に見えてくるので、オススメです。「ゆっくりなテンポで弾いていたつもりだったのに、こんなに焦っていたの？」とか「ここのビブラートはこんなに甘かったのか～」、「意外とバッキングのリズムの取り方はカッコ良いな！」など、いろいろな発見があると思うので、ぜひクリックを鳴らしながらギターを弾いて、レコーダーで録音して確認する…という練習方法に挑戦してみてください。

PHOTO：中田英之

石原 SHARA 慎一郎

大阪府出身。78年にEARTHSHAKERを結成し、83年にアルバム「EARTHSHAKER」でメジャー・デビュー。86年には国内のハードロック・バンドとしては初となる武道館ライブを開催する。93年にバンドは解散するものの、樋口宗孝、寺沢功一、二井原 実とのSLY結成を経て、99年にはEARTHSHAKERを再結成。現在はEARTHSHAKERをはじめ、サポートやソロ活動など、精力的に活動している。
http://www.earthshaker.jp/SHARA/

EARTHSHAKER「BIRD」
KICS-3168
3,000円（税別）
キングレコード

これがSHARAのセッティングだ！

▲最近のアンプは各つまみを真ん中にすると、ちょうど良い音になるように設計されており、簡単に素晴らしい音が得られます。僕はベースはフルにして、トレブルは絞り気味に、ミドルは真ん中くらいで、プレゼンスは2～4の間を行き来するのが好みのセッティングです